中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第20巻 第1号（2021）17－22頁

ダイバーシティについて考える

心理学部・心理学研究科創設記事の原稿執筆依頼がありました。創設時の記事はすでに十分であるので，まず考えたのは未来志向ともいえる内容でした。そこで4領域から高橋康介先生，松本友一郎先生，明翫光宜先生それに川島大輔先生にお声を掛けました。座談会形式で，現在から未来に向けて心理学の今日的問題として何があるかという点を検討しました。その中から，「ダイバーシティ」というテーマについて考えるという方向が打ち出されました。

この「ダイバーシティ」ですが，具体的には学問としての心理学として何を考えるべきだろうか，そして心理学部としてどのような取り組みができるだろうかという2点について，それぞれの領域的視点でご提言をいただくことにしました。先生方には，「ダイバーシティ」についてのお考えを手短にご執筆いただくことにしました。それがここに掲載されている提言になっています。折しも心理学部では「ダイバーシティ委員会」が活動を開始したところです。最近よく耳にするこの「ダイバーシティ」について，改めて考えるきっかけになればうれしいところです。

鬢櫛　一夫

臨床心理学の観点からみたダイバーシティ：

ニューロダイバーシティに焦点を当てて

臨床心理学領域　明翫　光宜

1．臨床心理学の対象領域としてのダイバーシティ

臨床心理学の研究および支援の対象となるクライエントは，こころの悩みや生きにくさを抱えた人々である。その悩みや生きにくさは，その人のこころの葛藤や過去の歴史性から由来するものもあるが，その多くの場合は精神疾患（Mental Disorder）や発達障害（Developmental Disorder）が関与している。近年では，精神疾患や発達障害を障害（Disorder）ではなく，ニューロダイバーシティ（脳の多様性）という視点で取りあげられるようになった。臨床心理学もダイバーシティに大きく関わるのである。ここでは，臨床心理学で出来ること，組織としての心理学で何が出来るかについて考察していきたい。

2．ニューロダイバーシティの臨床心理学的支援

臨床心理学では，クライエントの悩みや生きにくさについて，治療者に相談をして，その問題の解決に向けて，治療者の依拠する理論的立場に基づいて2人で治療的な会話を進めていく。この取り組みは，心理療法とよばれ臨床心理学でも歴史の長い支援スタイルである。心理療法も，クライエントの主訴や治療者の理論的立場に応じて，精神分析的心理療法，来談者中心療法，認知行動療法，ユング心理学，ブリーフセラピーなどがあり，これらに加えて近年ではEMDR，TFTなどのトラウマ治療なども実践されている。歴史的には心理療法の技術は着実に進歩している。

臨床心理学的支援は，直接的にクライエントに働きかける方法だけではなく，周囲の環境に働きかける方法（環境調整）もある。ここでニューロダイバーシティの観点が有用になる。Armstrong（2011）によれば，脳は生態系と同じように状況の変化に応じて変わる大きな能力があると指摘し，個性的な脳（ニューロダイバーシティ）を持つ人が快適に生きる機会を得るためにはニッチ（生態的地位：生存を可能にする環境条件がそろっていること）づくりにより可能になると提言されている。その積極的なニッチづくりは脳に直接働きかけて，ひいてはクライエ

ントが周囲に適応する力を高めるとされる（Armstrong，2011）。我々は，ニューロダイバーシティのそれぞれの脳の特性を精神病理学や認知心理学の知見から学び，その人に合ったニッチづくりをクライエントの家族および関係者に提案していくことが今後重要になるであろう。

３．組織としての心理学でダイバーシティを取り巻く問題に何が出来るか？

ニューロダイバーシティの領域では，視点を臨床心理学から心理学へと広くとっていくと古くからある大きな課題にぶつかってくる。偏見・スティグマの問題である。スティグマは他者からのスティグマもあれば自分自身に対するスティグマもある。

この点についても Armstrong（2011）は以下のように示唆を与えている。精神疾患は多大な困難や苦しみ，痛みを伴うことに加えて，スティグマに苦しんできた人々のポジティブな面に目を向けることが，彼らの苦しみを和らげる重要な要素のひとつである。「自分自身の秘めたる強みに気づくことは，自信を高め，夢を追う勇気を与え，特定のスキルを向上させて，人生に大きな満足をもたらす（Armstrong，2011 中尾訳2013, p.45）」ということは，我々の自己実現につながるステップでもある。精神疾患・発達障害の「隠れた強み（Armstrong，2011 中尾訳2013, p. 45）」を脳科学や認知心理学，発達心理学の研究で発見していく視点が重要になろう。

また多くの人々のスティグマに関する心理学的な取り組みも必要になる。現代を生きる人々の精神疾患および発達障害に関するスティグマや偏見に関する社会心理学の視点にたった実態調査を踏まえて，Armstrong（2011）が述べるように精神疾患・発達障害の人が持っている強みを世間に知らせる運動（啓発運動）を大々的に行われれば，疾患につきまとう偏見を減らすことにつながる。このように，ニューロダイバーシティの人々の支援のために心理学の領域間の共同研究が有用であろう。

文献

Armstrong, T. (2011). *The Power of Neurodiversity: Unleashing the Advantages of Your Differently Wired Brain (published in Hardcover as Neurodiversity)*. Boston: Da Capo Lifelong Books.
（アームストロング，T．中尾ゆかり（訳）(2013)．脳の個性を才能にかえる　子どもの発達障害との向き合い方　NHK 出版）

中京大学心理学部におけるダイバーシティの今後について

応用心理学領域　松本友一郎

１．応用心理学におけるダイバーシティ

応用心理学は様々な分野で成り立っている。それぞれ産業心理学，社会心理学，臨床心理学等，軸となる専門はあるが，社会に存在する問題に向き合い，社会の発展に寄与することを目的としているという点では一致している。そのような多様な分野によって社会を創造していくことを目指している応用心理学はまさにダイバーシティという理念に近い存在かもしれない。

私自身は応用心理学の中でも組織心理学を軸として活動しているため，ここでは組織という観点からダイバーシティについて考えてみたい。まず前提として，先の応用心理学の例のように，ダイバーシティは多様性によって社会を創造していくという点に重要な意味がある。しかし，組織にとってダイバーシティは対応が難しいものと捉えられる面もある。それは，現在の組織が性別，年齢，国籍，障がいの有無等においてある条件に該当する人のみを基準に作られているからではないだろうか。たとえば，１年365日を通じてずっと安定した体調で過ごせるというのは当たり前のことであろうか。当たり前とされている既存の基準に，後から加わった人々をいかに適応させるかという発想では，ダイバーシティのマネジメントはたしかに難しいと考えられる。

組織におけるコミュニケーションについて，voice と silence という概念がある。voice は自分の考え等について発言することであり，silence は自分の考え等を表に出さず沈黙することである。基本的に，組織のメンバーによ

る適度な voice は組織にポジティブな影響をもたらす。一方で，silence によって考え等が共有されなければ問題点の修正や新たなアイデアの活用の機会を組織は失うかもしれないという指摘もある（Morrison, 2014）。もし，当たり前とされている既存の基準が誰かの silence によって維持されているのなら，組織は表面上うまく回っているように見えるであろう。そのため，誰かの voice によって別の誰かの silence が生み出されることのないようにすることがダイバーシティのマネジメントには必要であると考えられる。

２．中京大学心理学部におけるダイバーシティ

本学部では，留学生や社会人等，様々な学生が勉学に励んでいる。それにより互いの視野が広がることはまさにダイバーシティであり，心理学を学ぶ上でとても意義深いことである。しかし，学部としてそれを生かすことができているのかという点については，まだ見直す余地があると思われる。このことについて，自分自身の反省から考えてみたい。

個人的な話になるが，2020年度から「キャリア形成」という必修科目を担当することになった。学生自身が主体的に卒業後の進路について考えることを目的とした科目である。初めての担当を一通り経験し，受講生が毎回の授業で考えを書くコミュニケーションシートを読んで気になったのは，この科目について自分自身がある条件に該当する学生を基準に考えていなかったであろうかということである。たとえば，社会人を既に経験している受講生にも卒業後について考える機会を提供できているのであろうかと考えると，次年度に向けて見直すべき点はあるように思う。それは，今後の中京大学心理学部の在り方を発展的に考えることにもつながっていると考えられる。

引用文献

Morrison, E. W. (2014). Employee voice and silence. *Annual Review of Organizational Psychology and Organizational Behavior, 1*, 173-197.

多様な人生に迫る心理学とは

―発達心理学からの試論―

川島　大輔

はじめに―「心理学で何ができるか」という問いの意味

「心理学で何ができるのか」について答えるのは簡単なようで実は難しい。この問い自体がすでに文脈に依存しており，誰がどの立場から発したものであるのかによって応答の内容が変わるためである。

例えば心理学以外の研究者からであれば，方法論に厳密であるといった心理学の特徴に触れ，認知科学や発達科学などの学際的研究における役割を主張するかもしれない。医療従事者からの投げかけであれば，実践や支援に資する発達臨床的研究の意義を主張するかもしれない。あるいは一般の市民からの質問であれば，TV などで流布される心理学に対するイメージを払拭しようと，科学であるということを強調するかもしれない。

このように問いに対する応答は常に誰に向かって語るのかという宛名性と切り離せないし，語りかける他者がいてはじめて心理学というディシプリンが社会的に構成される。もちろん，ここでは実際に問われているかどうかは重要ではない。それぞれがどのような他者を思い描き，そこに応答すべき責任性（responsibility）を感じ取るのかという点こそが重要なのである。

多様性を掬う心理学のアプローチの多様性

多様性というテーマに照らして，心理学は何ができるかという問いも同じである。これは認識論の問題に通じる。

例えば，心理学は科学であるべきであり，多様な現象に通底する構造や原理を探求すべきだと主張しようとすれ

ば，多様性はむしろ誤差をもたらし，可能な限り統制すべき対象となる。換言すれば，多様性は考慮すべきものであるが，統制可能な変数となり，研究の主たる関心事はマジョリティ，あるいは定型発達をいかに正しく捉えうるかという問題となる。WEIRD（Western, educated, industrial, rich, and democratic）な母集団データへの偏向や再現性の問題について議論する際には，こうした立場に基づき発話することになるだろう。またそこまで極端ではなくとも，千変万化する現象を説明しうるモデルを見出すそうとすることや，その上での個人差（のパターン）を同定しようとする欲求は多くの心理学者が持つものだろう。

他方で，多様性こそが人のあり方の本質であるとし，不当な扱いを受けているマイノリティに光を当て，既存の大きな理論や概念に対して脱構築を迫ろうとする場合，少数の事例の丁寧な記述を通じたアドボケイトな研究こそ選択すべきものである。そこでは例えば，マイノリティとされるセクシャリティやエスニシティなどに光を当て，剥奪された権利を取り戻すことに心理学がいかに寄与するのかがむしろ問われるだろう。実際，多様性と冠する実践や研究の多くは，マジョリティが自明視する事柄に対して変革を迫り，その権力や政治性について疑問を附すものではないだろうか。

さらに，マイノリティとマジョリティという区別自体に問題があると考えたり，定型非定型の二分法を超えようとする立場もあるだろう。この場合，両者の対話を促す研究や実践に主たる関心が寄せられる。そしてそれは，地域コミュニティの中で多様性を保ったまま，共生するために必要なことは何かを問うことにつながるだろう。それは具体的には，高度に専門化され細分化された実践・研究の環境から，人々が日々の生活を送る現場へと視線を向けなおすことかもしれない。あるいは，様々な立場や背景を有する人々がともに生きることを可能にする，思いやりに満ちたコミュニティ（compassionate community）の実現に向けて何ができるかを問うことかもしれない。

多様な人生に迫る発達心理学

発達研究の動向に目を向けてみると，近年では，普遍的な原理よりも状況や文脈などの関係性に，より関心が寄せられてきた。中でも，多様な人の生きるかたちに迫る臨床，障害，実践研究と基礎研究との連続化や包摂化を目指す発達臨床的アプローチへの関心の高まりは顕著である。

発達臨床的支援に際しては，今ここを重視して当事者の気持ちに寄り添うのはもちろんのこと，生成的（becoming）側面，すなわち当人自身がどのような存在になろうとするのかという明日の発達を思い描けるよう，支援者がその発達の足場として機能することが必要である。しかし当事者も支援者も社会的規範や慣習によって形作られてきた定型的な発達の筋道から完全に逸れることはできない。むしろ我々はつい定型的な発達モデルを思い描き，それに自身や他者の言動を当てはめやすい。また，当事者と支援者という非対称的な関係性こそが問題であると考えることもできるだろう。それは当人の能動的な発達を阻害するものであり，むしろ脱構築するべきものになる。

それではどうすれば良いのか。その手立ての一つが，他者との不断の対話を通じて，自身が暗黙理に有する信念や価値観への省察（reflexivity）を行うことであろう。我々は自らの信念や価値観から離れることは容易ではない。そのため自分とは異なる立場や分野との対話が必要となるのである。

心理学（部）と学際・異分野融合

近年盛んに議論される学際や異分野融合は，研究分野の細分化や専門性の過剰による知の分断を危惧し，また多様で複雑な問題への対応を可能とする新たな知の創造を企図した学術的動向である。そこでは異なる学問分野同士が対話を通じて互いを知るということにとどまらず，既存の境界がなくなり，新たな学問分野が創造されることまでが含まれる。もちろんこれは学問分野という大きな視点での話であり，個々の研究者のレベルで見れば，心理学と他の学問を隔てている境界が全くなくなるというのも想像しにくい。むしろ，他者との対話を通じて，心理学の新たな意義が見出され，その果たすべき役割が一層明確になる可能性もあるだろう。

こうした社会的動向に鑑みれば，心理学のみで何かをなし得るという時代ではもはやなくなるかもしれない。学際融合の流れは今後ますます加速化するだろうし，その中で，心理学部という組織が，今後もその存在意義を保てるかどうかは正直筆者にはよくわからない。

確かに心理学という一つの学問分野に閉じることによって，より専門的な教育研究が可能になるだろう。他方

で，他者不在のモノローグを増やす危険性を孕んでいるかもしれない。特に公認心理師の国家資格ができたことの影響は大きい。この資格設置自体は現場のニーズを考えても大変喜ばしいが，同時に，カリキュラムが資格関連の科目に大きく偏ることで，そこから外れた科目は履修されにくくなってきているようにも感じる。この状態が今後も続けば，教育が偏向し，多様で複雑な実践現場での共生や，学際的研究の実施はむしろ難しくなってしまわないだろうか。これが杞憂で終わることを祈るばかりである。

おわりに―新たな対話へと読者を誘うテクストとして

この企画では，同じ心理学部に所属しつつ，その研究テーマや専門領域が異なる著者達が，それぞれに多様性をテーマとして心理学の意義を語っている。そこで語られる意義は多様であるが，とりとめのない（discursive）印象の中に，共通する点が読み取れるかもしれない。そして，それらを重なることによってはじめて浮き彫りになる，〈心理学の意義〉もあるだろう。つまり，このテクストもまたここで完結するものではなく，読者の多様な読みに開かれているのである。そしてそこから，読者を話者とした，心理学（部）の可能性についての新たな対話へとつながることを期待したい。

本稿を含めた今回の企画が，もし多様な読み取りを可能にする豊かなテクストを提供できていたならば，多様性の時代における心理学部の意義もまだあるのではないかと思う。それについてのご判断は読者に委ねることとしたい。

「知る」と「わかる」

―多様性と実験心理学，および心理学教育について―

高橋　康介

人間の心に関して一般化可能な原理原則の探求を試みる実験心理学と，個人や集団がそれぞれさまざまなレベルで異なることを前提としそれを活かそうとする多様性とは，一見して異なる方向を向いているように見える。実験心理学，あるいはより広く実証的な心理学が多様性の状況にどう貢献し得るのかという問題に関して，巨視的な見地から考察することは私の力量では難しい。そこでまずは色覚多様性とカラーユニバーサルデザイン（CUD）という具体例からこの問題を考えてみたい。

よく知られているように，人間の網膜には波長応答特性の異なる３種類の錐体細胞が発現している。詳細なメカニズムは省略するが，この３種類の錐体細胞の応答を組み合わせることで，色とりどりの世界が視覚意識に立ち現れる。しかし男性で数％，女性で１％未満の割合で，先天的にいずれかの錐体細胞が発現しない，あるいは極端に数が少ない人たちがいる（日本で300万人以上と推定される）。これは現在では「色覚多様性」と呼ばれ（21世紀初頭までは「色盲」「色弱」と呼ばれることが多かった），例えば最も頻度の多い２型色覚者では，色覚正常者ならば容易に見分けられる赤と緑の弁別が困難な場合がある。

ところで周囲を見渡せば，色が情報を伝えるデザインを至るところで目にする。人間の視覚が色を認識するように進化してきたのだから，色を使って情報を伝えることは理に適っているとも言える。しかし色覚多様性について知っていれば，色の見え方が誰にでも同じではないということにすぐに思い至る。このような流れの中で，色覚多様性を考慮し多くの人に情報を伝えられるデザインとしてCUDという考え方が広まっていった。現在では街中で見かけるデザインの多くにCUDが取り入れられている。

色覚多様性からCUDに至る流れの中では，実験心理学が役立つ場面が多くあるように思える。まず色覚多様性という現象を正しく知り，社会的問題の所在を明確にすることが必要であるが，色覚多様性は物理的な光の波長が人間にどのように知覚されるかという関数の多様性とみることができるので，ここでは実験心理学的な研究から解決すべき問題を明確にすることができる。次いで解決策のひとつは，特定の人や集団にとって識別困難な色遣いを避けることであり，そのためには色覚多様性を前提として，個々人が色をどのように見ているのか解き明かす必要

がある。これもやはり刺激（波長）と反応（色の見え）の関数を同定する実験心理学の仕事に関連すると考えられる。

色覚多様性のような比較的単純な物理量と感覚質の関数の多様性についての議論を，現代社会の中に現れる多層的で複雑な多様性の状況に直接当てはめることは難しいかもしれない。しかしどれほど複雑なものであったとしても，出発点は「知ること」にあるだろう。ここでやはりCUDを例に「知ること」と「わかること」の違い強調しておきたい。異なる波長の光がどのように弁別されるかという実験を通して，その人の持つ関数の特性を「知る」ことが可能である。しかしその特性を知ったとしても，私たちは決してその人が見ている世界を「わかる（体験できる，経験できる）」わけではない（色覚多様性シミュレーター等の技術を使うとある程度近い状況を再現することはできる）。同様に，異なる立場，考え方，値観感，認識の仕方を持つ者が共存する多様性の状況では，原理的に「わかる」ことは出来ないはずである。CUDがそうしたように，わからないながらも知ることで，そこに特定の人や集団の困難，不利益があるということ，あるいは社会的課題があるということ，そしてその具体的な解決策が何かということを見出すことができる。

本論において実験心理学者として言いたいことは，まず何よりも「知ること」の重要性である。実験心理学が，人間の心についての驚くべきことや面白いことを物語ろうとする学問ではなく，ただひたすら人間という生き物の心の特性を知ろうとする学問でありつづける限り，自分自身とは異なるものの考え方，価値観，認識の仕方といった多様性を前提とする社会の中で果たす役割は，実は大きいのではないだろうか。もちろんあらゆる種類の多様性に直接的につながるわけではないだろうし，実験心理学のアップデートも必要だろう。あっと驚くような物語を追い求めるのではなく，これまでノイズとして扱ってきた環境や個人差を丁寧に扱い，人間の心の仕様を高い解像度で解き明かすこと，欲を言えば定量的なレベルで解き明かすこと。このような作業の蓄積により，多様性の状況の中で実験心理学が貢献できる場面は少なからずあるだろう。しかしこれは何も新しいことではなく，ある意味ではヴェーバーやフェヒナーの時代に立ち戻ることなのかもしれない。

さて，これまでの議論を踏まえ，心理学部における心理学教育について触れておきたい。心理学部は人間の心を対象とする学問を学ぶ学部である。これはあまりにも当たり前ではあるが，他の学部にはない特色である。誰もが心をもっている。誰もが他人の心と触れ合う。だから心についてはなんとなくわかった気になれる。特に自分と似た背景，価値観，考えを持った人のことはよくわかり，共感もできる。しかし逆に言えば自分とは異なる人のことはわからない。翻って多様性の状況とは，わからない人同士が共に過ごすことである。

わからない人同士が共存する社会の中で協調し，特定の人々の不利益や差別，偏見を減らすには，結局のところわからないながらも知ることが出発点である。であるなら，心の学問を学ぶ心理学部は，多様性の状況を認識しその中で活躍できる人材育成という点で一日の長があると言えるだろう。心についての体系化された知を学ぶことを通して，自分はそうではなくてもそう見える人がいること，自分はそうではなくてもそれで傷つく人がいるということを，わかるかどうかは別として少なくとも知ることはできる。こうして学んだことは，知らなければ「わからない」で終わっていた場面で，わからない他者と協調していくための原動力になるはずである。

以上，多様性という状況の中での実験心理学および心理学教育について，「知る」と「わかる」の対比を中心に議論を進めてきた。科学の世界には「巨人の肩の上に立つ」という言葉がある。先人の知の上に立つことで，自分ひとりでは届かなかったであろう新たな知に到達できるということである。これは何も科学の世界に限られないのではないか。自分とは異なる心の有り様を知ることで，多様性の状況の中にあって，より広く遠くを見渡すことができるようになる。その結果として私たち人間社会はさらなる多様性を実現し，その多様性は人間社会の強みとなるに違いない。拙い文章ではあるが，筆者の思いが多くの人に伝われば幸いである。